

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00836

研究課題名（和文）リテラチャー・サークルの話し合い活動における英語使用の実態調査と指導法の研究

研究課題名（英文）Research into the students' use of English in literature circles discussions and teaching methods

研究代表者

立松 大祐（TATEMATSU, Daisuke）

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：10756828

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：リテラチャー・サークル（LC）の話し合いにおける中学3年生の英語使用状況を分析し、中学校での指導の際に教員が参照できるデータを示した。また、生徒は英文トピックを自分の経験などにつなげ、自分の考えや意見を伝え合うなど深い学びを実現している。GIGAスクール構想により学校のICT環境が整備され、ICT活用のLC指導へと発展し、「対話のための自己評価ツール」と「全員での質問づくり」を加えた、新しいLC指導モデルを提案し実践した。最終年度には遠隔地の学校とオンラインLC交流学習を実現できた。リテラチャー・サークル研究会HPでは、指導の参考になる情報を動画にして内容の充実を図り、指導方法の普及に努めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語教育におけるLCの実践研究は、学習指導要領で求められる主体的・対話的で深い学びを実現する言語活動の開発に資するものである。生徒が英文を読み、自分ごととして話し合うLCなどの言語活動の研究は国内では限定的であり、本研究で得られた成果は、対話的教育の実践の発展及び生徒の当事者意識涵養、学習者エンゲージメントの研究、英語コミュニケーション能力向上の研究に貢献することが期待される。また、LC指導法の見直しは、中学校での実践観察を通して実現したものであり、理論と実践の往還が進んでいる例と言える。研究成果をHPで発表することにより、実践者の増加と当言語活動の普及が期待される。

研究成果の概要（英文）：The use of English by third-year junior high school students in literature circles (LC) discussions was analyzed to provide data that teachers can refer to when teaching in junior high schools. The ICT environment in the school was developed through the GIGA school concept, and the LC instruction using ICT was developed, and a new LC instruction model was proposed and implemented, adding 'self-evaluation tools for discussion' and 'question formulation with all students'. In the final year, online LC exchange learning with schools in remote areas was realized. On the Literature Circles Research Center website (<http://lrcr.ehime-u.ac.jp>), the content was enriched with videos with information that can be used as a reference for instruction, and efforts were made to disseminate the instructional methods.

研究分野：英語科教育学

キーワード：リテラチャー・サークル 指導法の開発 中学生の英語使用状況 ICT機器の活用

1. 研究開始当初の背景

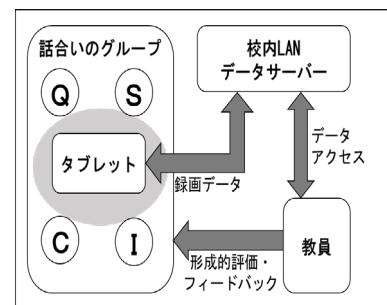
文部科学省は「第2期教育振興基本計画」などを策定し、生徒の英語力の目標設定と検証を行っている。平成29年度の「英語教育改善のための英語力調査」では、全国の中学校3年生及び高等学校3年生を対象に、英語の4技能が育成されているか検証するため、英語力と学習状況の調査を行った。調査結果は、中学生の50%はCEFR A1上位レベル以上、高校生の50%はA2レベル以上と設定した到達目標に大きく届かない状況であった。一方、質問紙調査と英語力のクロス集計から、技能統合的な言語活動の実現が英語力を高めると報告された。新学習指導要領では互いの考えや気持ちなどを伝え合う対話的な言語活動をより一層充実すること（中学校）、統合的な言語活動をより一層充実するとともに、発信力の育成をさらに強化すること（高等学校）が示された。2020年度から全面実施の小学校英語教育を踏まえた、英語力育成のための授業改善策が求められた。

「聞いたり読んだりしたことについて、書いたり話したりする」統合的で対話的な言語活動の開発と実践は授業改善のための方策の一つである。申請者は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善例として、アクティブ・ラーニング型の言語活動であるリテラチャー・サークル（LC）指導の研究を行っている（立松，2016）。LCは、学習者が読んでいる本についてグループで議論したり質疑応答したりする活動であり、協同学習を基盤としたリテラシー教育である。日本の英語教育においては、教科書英文を主教材に、グループでその内容について英語で話し合う活動は領域統合型言語活動であり、指導モデルを整理すれば実践可能であると考えられる。

申請者は愛媛大学教育学部附属中学校と共同研究を行い、中学3年生を対象にしたLC活動の指導手順と授業モデルを提案した（立松・河野，2020）。グループの読みの役割をQuestioner（Q）、Connector（C）、Summarizer（S）、Illustrator（I）に絞り、ICTを活用して実践をしている。図1は、生徒が話し合い活動をタブレット端末で録音・録画し、教員はサーバーに保存されたデータから形成的評価とフィードバックを行うことを表している。これまでは難しかった、グループの活動における各役割の生徒の発言内容の把握ができるようになった。話し合い内容を文字化し談話分析することで、LC活動中の英語使用の実態と、生徒はどこに困難を抱え、どのような支援が必要であるかなどの課題が明らかになり、指導と評価の改善ができる。また、LC活動における英語使用の指標となるベンチマークの設定ができる。

アメリカではL1での授業と同様に、英語学習者（英語以外を母語とする移民）の読解能力と言語能力全般を育成する方法としてLCの実践研究が行われている（Elhess & Egbert, 2015）。オーストラリアの小学校でも対話的な学びの指導法として研究が行われている。LCは協同学習であり技能統合型言語活動であるが、日本での実践研究例は極めて限定的である。英語使用の実態把握の研究は、対話的な学びの実践研究を行う研究者と教員に有益であり、当研究分野の発展が期待できる。

図1. 中学校でのLC指導環境



2. 研究の目的

LC活動の中心となる話し合いでの生徒の英語使用実態と指導の課題を明らかにし、地域の学校に指導方法を普及することである。まず、LC活動中に中学生はどのように英語で話し合っているのか、英語使用の実態を把握し、LC指導方法の改善を図る。次に、話し合い活動における英語使用の複数年調査から、LC活動における目標となる英語使用のベンチマークを各学年で設定する。さらに、英語圏のリテラシー教育の取組を日本の英語教育に応用し、技能統合的で対話的な言語活動が中心になる教授法を開発する。

3. 研究の方法

LC活動において中学生は英語でどのように話しているか、英語使用の実態を把握し、LC指導方法の改善を図るため、約15分間の話し合い活動の文字起こしデータについて量的・質的分析を行う。図1のタブレットに360度カメラを接続し、話し合いで誰が何を話しているか可視化する。分析はグループの会話総語数と、各生徒(役割)のターンテイク数、1語発話数、2語発話数、句発話数、文発話数、日本語使用数の点から行う。また、話し合いの内容が主体的、対話的で深い学びに資するものか分析を行う。これらの分析を踏まえて、指導と評価の改善を図る。

次に、英語使用状況の複数年調査から、LC活動における目標となる英語使用のベンチマークを各学年で設定する。LC指導を中学1年生から開始し、1年生から3年生までの同集団の話し合い活動における英語使用について複数年の調査を行う。分析は上に示したものと同等の方法と観点で行う。

さらに、英語圏のリテラシー教育の取組を観察し、技能統合的で対話的な言語活動が中心になるよう日本の英語教育に応用し教授法を開発する。対話的な学びの事例である、LCやソクラテック・セミナーなど英語圏のリテラシー教育を応用し、統合的で対話的な言語活動が中心になる指導法を開発する。

研究期間を通して、LCは英語力向上のどの技能に貢献するか、生徒は対話を通して協同的に

学んでいるかを長期的に研究する。文献や事例による基礎的研究と実践の積み重ねから、LC 実践・研究のための情報発信拠点としてホームページを制作し、実践事例、使用教材、ワークシート等を公開する。

4. 研究成果

本研究において、特に研究期間 1 年目の 2020 年度は、新型コロナウイルス感染症拡大により全国の学校が一斉休業を行うなど、中学校の授業を対象に実践と観察を行うことが中心になる本研究にとって、学校訪問が難しい状況になった。一斉休業後も感染症予防対策として、各学校においてはペア活動やグループ活動の制限、教室に入ることができる人数の制限が設けられるなど、研究活動に制限があった。2021 年度以降もさまざまな制限はあるものの、GIGA スクール構想により各学校に ICT 機器が整備された結果、ICT を活用した LC 実践が行われるようになった。これらの成果については、後述する。また、研究期間中にアメリカ等の小中学校での授業観察による資料収集などの研究も渡航制限のため難しくなった。しかしながら、研究期間を 1 年延長した 2023 年度は新型コロナウイルスによる外国渡航の水際対策が緩和され、シアトルの小中学校でのリテラシー教育の観察を行うことができた。

2020 年度の一斉休業措置後に、国立大学教育学部附属 A 中学校 3 年生の授業において、LC を実施し約 15 分間の話し合い活動を行った。生徒の話し合い活動は、図 1 の 360 度カメラによって撮影し映像と音声をデータの形で残すことができた。グループのメンバーを固定した LC を 4 回実施することができた。ビデオを再生し、発言する生徒を特定しながらの文字起こしはかなりの時間がかかるため、本年度の分析は 1 グループの 4 回分の会話語数と、各生徒(役割)のターンテイク数、1 語発話数、2 語発話数、句発話数、文発話数、日本語使用数の点から行った。LC の回数を重ねることにより、総じて会話語数やターンテイクが増加する傾向が見られた。同時に、各生徒のコミュニケーション志向や体調なども発話に大きく影響する可能性があることも確認できた。それらに加え、話し合い活動の談話分析を行ったところ、既習の事項を活用して自分の思いや考えを伝える深い学びが実現できていることが確認された。本年度の中学 3 年生の実践から、中学 3 年生の 2 学期における 4 人グループの 15 分間の会話では、800 語から 1,000 語程度の語数、文発話は 100 文程度が産出されることが確認できた。これらの数値は、複数グループとの分析結果を重ねてさらに精緻化していくべきものである。指導方法の地域への普及について、LC 指導モデル開発の成果(図 2)と具体的な指導方法を教員研修において還元することができた。愛媛県教育委員会、松山市教育委員会での教員研修、愛媛大学教職大学院と松山市教育研修センター共催の大学連携セミナーにおいて教員研修を企画し、地域の教員に LC 指導のためのワークショップを行った。さらに、実践についての情報を「リテラチャー・サークル研究会ホームページ(<http://lrcr.ed.ehime-u.ac.jp>)」で公開することができた。

立松(2021)では、2020 年 8 月後半から 11 月にかけて A 中学校 3 年生の授業(生徒 32 人で 1 グループ 4 人構成の 8 グループ)で取り組まれた LC の 1 グループのデータを抽出し、英語使用状況と対話の状況を報告した。他のグループの英語使用状況を見ると、7 グループの 4 回分の実践があったが、欠席生徒や機器の不具合などで 15 分間の録画ができなかったグループを除くと 3 グループのデータが残った。立松(2022a)では、4 回分の話し合い活動における各グループ(Group 1 から Group 3)の生徒(A から L)の語数と平均値をまとめた(表 1)。各グループの各回の合計を見ると、第 1 回から 2 回目にかけて使用語数は大幅に増加し、それ以降は多少の増減はあるものの合計された語数は安定していると言える。

表 1 使用語数のまとめ (n=12)

	生徒	1回	2回	3回	4回	AVG
Group 1	A	109	172	158	119	139.5
	B	149	289	372	473	320.75
	C	147	140	147	169	150.75
	D	166	267	141	181	188.75
	計	571	868	818	942	799.75
Group 2	E	260	340	264	303	291.75
	F	100	99	88	153	110
	G	146	271	211	237	216.25
	H	128	259	237	216	210
	計	634	969	800	909	828
Group 3	I	81	177	99	154	127.75
	J	115	103	207	290	178.75
	K	181	269	185	171	201.5
	L	74	131	195	111	127.75
	計	451	680	686	726	635.75

同様の手法を用いてターンテイク数を調査したところ、1 回目から 2 回目に大幅に回数が増加したことが確認された。文末の発話数の分析結果から、ターンテイク数が最も多かった Group 2 では、他グループと比較すると数値が大きい、生徒の発言データから、このグループでは“yes, ok, sorry, I think...”といった短い反応を何度も繰り返し発言したり、前の話者の発言の一部を複数のメンバーが繰り返して内容の確認をしたりしていることが顕著であった。コミュニケーションを継続させるために短い反応を多用したことによりターンテイク数も増加したことが分かる。

表 2 は、基本的に主語と動詞のある文の発話数をまとめたものである。どのグループにおいても

図 2. LC の指導手順

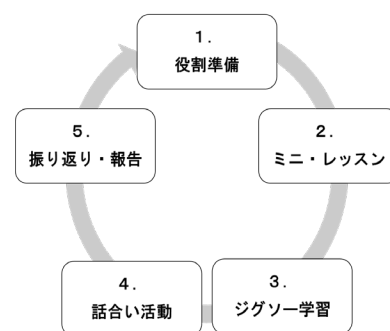


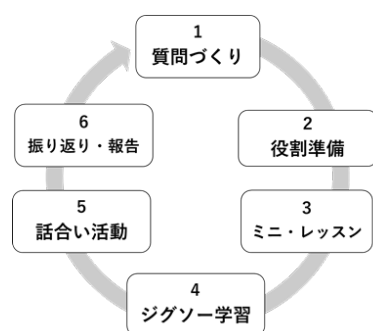
表2 文発話数のまとめ (n=12)

	生徒	1回	2回	3回	4回	AVG
Group 1	A	10	17	20	14	15.25
	B	11	27	38	56	33
	C	14	18	18	16	16.5
	D	20	31	13	17	20.25
	計	55	93	89	103	85
Group 2	E	25	40	28	37	32.5
	F	9	12	11	13	11.25
	G	15	25	27	23	22.5
	H	11	21	31	19	20.5
	計	60	98	97	92	86.75
Group 3	I	6	19	11	18	13.5
	J	14	12	21	26	18.25
	K	21	34	18	13	21.5
	L	7	15	21	13	14
	計	48	80	71	70	67.25

活動中のやり取りをよく見る必要がある。本取組における対話の文字起こしの分析例では、英文内容から関連付けられた生徒自身の経験が話題の中心となり、自分の考えをやり取りしている。これは、それまでに獲得した知識や技能を活用し、英文内容を自分の思いや考え、経験と結びつけており、英語学習における深い学びを実現している例であろう。読みの役割に Connector を設定し、生徒に英文を読み自分自身とのつながりを考えるよう促していることが、英文内容を越えた話し合いの実現に奏功していると考えられる。

LC 実践では、生徒同士による質疑応答が多く見られ、そのことが生徒に何度もテキストを読ませ理解を深めさせることになっていることが分かる。生徒による質問づくりは、生徒に主体的により深く考えさせる学びの機会をつくり、長期的には自立した学習者の育成につながると考えられる。立松 (2022b) では、Rothstein and Santana (2011) の質問づくりのステップを採用し、グループワークを通して生徒が質問をつくり、そのプロセスで発散思考、収束思考、メタ認知思考を経験できるよう指導モデルを外国語学習用に改編したものを提案した。グループで質問づくりや話し合いを行うことは、自分とは異なる他の児童生徒の考えや気持ちを理解する態度を涵養することになる。生徒による質問づくりは、生徒は質問を作るために自分の考えを選択したり決定したりするなど能動的に学習し、長期的にはクリティカル・シンキングを身に付けることが期待され、いわゆるアクティブ・ラーニングになり得るが、外国語教育での児童生徒を対象にした実践研究は不足している。

図3 LC の新しい指導手順



そこで、立松・和家・武田・宮内 (2023b) では、立松 (2023a) での授業支援システムであるロイロノートなど ICT を活用した LC 実践報告を踏まえて、生徒による質問づくりを加えた新しい LC 指導モデルを提案した (図3)。従来の指導手順に加えられた「質問づくり」の段階では、最初に全員が読み物内容についてできるだけ多くの質問を作り、作成した質問は Questioner 役の生徒に提出するようにした。これによって、生徒は従来よりもより深く英文内容を読み、テーマを自分ごととして考えられるようになることが考えられる。その後の「役割準備」においては、Questioner はグループメンバーから集まった質問を整理し、重要な質問の順位付けを行い、場合によっては質問を閉じた質問から開いた質問に作り変えるなど質問リスト作りを行うのである。さらに、生徒は対話で

求められることを確認し、到達状況を自己評価し、教師は形成的評価ができるための「対話のための自己評価ツール」を作成した (図4)。さらに、当報告では、2023年1月に実現したオンライン LC についても紹介した。松山市立 B 中学校と宇和島市立 C 中学校の中学2年生が、「A Glass of Milk」(NEW HORIZON English Course 2) という教材で、単元末の言語活動として LC を活用した交流学習を行った。生徒・教員にとってオンライン交流授業は初めての取組であったが、周到な準備の結果により生徒の学びや動機づけへの影響は大きかった。今後の継続した取組により、生徒の英語コミュニケーション能力の向上に資するか検証する必要がある。

本研究課題の主な成果は、中学3年生の活動中の英語使用状況を把握することができたこと、対話のための自己評価ツールや全員での質問づくりを加えた新しい LC 指導モデルを提案し実践できたことである。さらに、コロナ禍において時期を同じく進められた GIGA スクール構想により各学校の ICT 環境が整備されたことにより、ICT を活用した LC 指導への発展と遠隔地

2 回以降の文発話数は安定している傾向がある。データから、Group 1 の生徒は文末満の発話は抑制的であり、意見や考えを文で表現する傾向が強いことがわかった。特に、生徒 B は話し合いの回数を重ねるごとに文発話数が増加し、第1回での11文から第4回では56文を産出している。Group 2 では、生徒 F の文での発言が他の観点と同様に一貫して少なかったことが明らかになった。また、Group 3 では他のグループのように文発話数が大きく変化した生徒はいないことが分かる。

読みの役割が生徒の話す語数に影響を与えているのかを確かめたところ、立松 (2021) では1グループのみではあるが、4つの役割 (Questioner, Summarizer, Connector, Illustrator) のなかで Illustrator を担当した生徒の語数が他の役割の語数よりも若干少ないという結果であった。立松 (2022a) は3グループ12人の4回分の LC での発話語数を調査したところ、Questioner 役の生徒の発話語数が多く、他の役割の語数はほぼ同じであることが判明した。

生徒の話し合い活動をよりよく理解するには、

の学校とオンライン LC が実現できたことである。これらの成果によってリテラチャー・サークル研究会 HP には、指導の参考になる情報について動画を含めて充実させることができた。これら英語教育における LC の実践研究は、国内では限定的であり本研究で得られた成果は今後のさらなる実践に発展することが期待される。今後の課題として、LC を指導できる教員の増加と組織化がある。指導体制を組織化することによって、授業についての情報交換などが進み実践数も増加し、オンライン LC につながる取組も増加することが期待される。また、本研究課題において、アメリカ等のリテラシー教育の指導法を応用することを掲げた。A 大学教育学部附属中学校では、LC に **philosophy for children** の手法を取り入れた実践研究を進めることができた。この指導法は国内では主に道徳の授業で採用されており、中学校の外国語の授業での実践研究は始まったばかりである。最終年度に訪問することができたシアトルの小学校では **philosophy for children** を専門とする教員による授業を観察することができ、指導のためのヒントを多く学ぶことができた。それらを附属中学校での実践に取り入れ、生徒のコミュニケーション能力の向上に資するか検証を行いたい。

図 4 対話のための自己評価ツール（一部）

<p>【会話スキル】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 積極的な態度と表情で明確に話し、アイコンタクトやジェスチャーを使う。 2. 適切な発言の回数と量で話をする。 3. メンバーの発言内容や考えを生かして協力して話し合いをする。 4. メンバーに考えや気持ちの根拠や理由を示したり、考えの理由や根拠を聞いたりする。 <p>【知識・技能】</p> <ol style="list-style-type: none"> 5. 単語から句や文の大きなかたまりで発言する。 6. 考えをまとめ、文と文を適切につなげて構成する。 7. 重要な語について説明をしたり別の表現で言い換えたりして、英語で伝えようとする。 <p>【思考・判断・表現「読むこと」】</p> <ol style="list-style-type: none"> 8. 情報を選択・抽出して事実を述べたり、自分の考えや気持ちとその理由を述べたりする。 9. 情報を選択・抽出して事実を述べたり、自分の考えや気持ち、内容に対する賛否とその理由を述べたりする。 <p>【思考・判断・表現「話すこと（やり取り）」】</p> <ol style="list-style-type: none"> 10. 読み取ったことや感じたこと考えたことを伝える。 11. 内容を整理し自分で作成したメモなどを活用しながら、口頭で要約したり自分の考えや気持ちなど伝え合ったりする。 12. メンバーの発言内容や考えを把握し、適切に応答したり関連する質問をしたりして会話を継続する。

<引用文献>

立松大祐 (2016). 「リテラチャー・サークルを取り入れた授業改善の試みーアクティブ・ラーニング型授業の指導事例ー」『愛媛大学教育学部紀要』, 63, 93-102.

立松大祐・河野圭美 (2020). 「英文を読んで話し合う協同学習の授業モデルづくりーリテラチャー・サークルの実践からー」『英語授業研究学会紀要』 28, 109-120.

立松大祐 (2021). リテラチャー・サークルにおける生徒の英語使用状況調査ー中学 3 年生 1 グループの話し合い活動の分析ー」『英語授業研究学会紀要』 30, 57-69.

立松大祐 (2022a). 「話し合い活動における生徒の英語使用調査ー中学 3 年生 3 グループによる 4 回の発話記録からー」『愛媛大学教育学部紀要』 69, 20-30.

立松大祐 (2022b). 「児童生徒による質問づくりを取り入れた英語の授業実践に向けて」『大学教育実践ジャーナル』 21, 117-124.

立松大祐 (2023a). 「デジタル学習環境における外国語教育の言語活動指導事例」『大学教育実践ジャーナル』 22, 63-70.

立松大祐・和家加奈・武田慶子・宮内京子(2023b). 「ICT を活用した中学校でのリテラチャー・サークル実践とオンライン交流授業への挑戦ー中学校・市教育研修センター・教職大学院による協働的な取組ー」『愛媛大学教育学部紀要』 70, 116-127.

Elhess, M. & Egbert, J. (2015). Literature circles as support for language development. *English Teaching Forum*, 53(3), 13-21.

Rothstein, D. & Santana, L. (2011). *Make just one change-teach students to ask their own questions*. Harvard Education Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 立松大祐, 和家加奈, 武田慶子, 宮内京子	4. 巻 70
2. 論文標題 ICT を活用した中学校でのリテラチャー・サークル実践と オンライン交流授業への挑戦 - 中学校・市教育研修センター・教職大学院による協働的な取組 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 愛媛大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 116, 127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立松大祐	4. 巻 69
2. 論文標題 話し合い活動における生徒の英語使用調査 - 中学3年生3グループによる4回の発話記録から -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛媛大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 20-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 立松大祐	4. 巻 22
2. 論文標題 デジタル学習環境における外国語教育の言語活動指導事例	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大学教育実践ジャーナル	6. 最初と最後の頁 63-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 立松大祐	4. 巻 30
2. 論文標題 リテラチャー・サークルにおける生徒の英語使用状況調査 - 中学3年生1グループの話し合い活動の分析 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英語授業研究学会紀要	6. 最初と最後の頁 57-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立松大祐	4. 巻 21
2. 論文標題 児童生徒による質問づくりを取り入れた英語の授業実践に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学教育実践ジャーナル	6. 最初と最後の頁 117-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立松大祐	4. 巻 67
2. 論文標題 リテラチャー・サークル実践と英語使用状況の予備的調査 - 中学3年生の話し合い活動の文字起こしから -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛媛大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計9件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 立松大祐, 和家加奈, 武田慶子
2. 発表標題 ICTを活用したリテラチャー・サークル実践とオンライン交流授業への挑戦
3. 学会等名 全国英語教育学会 第48回香川研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 立松大祐, 松永麻由, 和家加奈
2. 発表標題 生徒の伝えたい気持ちを引き出す統合型言語活動 - 教科書内容を自分ごとに行える協同学習 -
3. 学会等名 英語授業研究学会関西支部第309回例会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 河野圭美・立松大祐
2. 発表標題 自律した学習者を育てる英語授業 - リテラチャー・サークルの実践 -
3. 学会等名 第33回四国英語教育学会徳島研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 立松大祐
2. 発表標題 読むことと話すことの統合
3. 学会等名 全国英語教育学会第47回北海道研究大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 立松大祐
2. 発表標題 リテラチャー・サークルの話し合い活動に取り組む中学3年生の英語使用調査
3. 学会等名 日本教科教育学会第48回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 立松大祐
2. 発表標題 附属中学校と取り組む英語を読んで話し合う活動
3. 学会等名 令和3年度日本教育大学協会四国地区研究集会「高知集会」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 立松大祐
2. 発表標題 リテラチャー・サークルにおける英語使用状況調査 - 中学3年生の1グループに焦点を当てた事例研究 -
3. 学会等名 英語授業研究学会第32回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 立松大祐
2. 発表標題 リテラチャー・サークル活動中の中学3年生の英語使用状況
3. 学会等名 第32回 四国英語教育学会 高知研究大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

リテラチャー・サークル研究会 (Literature Circles Research Center) http://lcrc.ed.ehime-u.ac.jp/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	池野 修 (IKENO Osamu) (70294775)	愛媛大学・教育学部・教授 (16301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	多良 静也 (TARA Shizuya) (00294819)	高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・教授 (16401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関